
真桜姫伝承

山狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真桜姫伝承

【Nコード】

N1584I

【作者名】

山狗

【あらすじ】

『桜姫伝承』それは鬼の里に語り継がれる悲恋の物語。

鬼の一族の筆頭、鈴鹿家の当主、鈴鹿灯哉。

彼らの日常を蝕むは、突如現れた妖、桜姫。

敵として立ちはだかる桜姫とその従者に、術もなく敗する灯哉とその仲間たち。

しかし、少しずつ伝承が明らかになるうち、

解き放たれる真の伝承。

そして桜姫と従者の秘密。

抗えぬ運命のもと、集結し、無駄だと知りながら、彼らは抗うことをやめはしない。

『真実』と【運命】に立ち向かう、
人ならざる者の物語。

愛しいひめ（前書き）

こちらはプロローグへ行く前の、モノローグのようなお話です。
次回から主人公、舞台、登場人物などが変わります。

愛しいひめ

人ならざるものに愛され、

自らも人ではなくなった姫が辿った、

本当の道筋とは ？

少しずつ、確実に明かされていく、『真実』

必然的に、彼らを蝕む【運命】

あなたなら、どんな方法で

抗いますか？

桜が、はらはらと舞い落ちていく。はらはらはらと、この世に咲き誇っていたことを否定し、全て無へと返すように。

今まで咲いていたことなどに意味はなくて、無駄であるのだと、そう言うように。

それはまるで、自分の天命のようだ、男はそう思った。

天に美しい月が昇った夜の桜の木の下で、長髪の男と少女が対峙していた。彼らの周囲は、むせ返るほどの鉄の臭気に満ちている。

その臭気を発しているのは男の方で、彼は全身が血まみれだった。着物がところどころ切刻まれ、そこから血液が、吹き出るような勢いで滴っていた。ぼたり、ぼたりと、血の雫がいくつも飛散し、地

にしみを作りだしている。

今まで彼がどこを通って今の位置に立っているのか、血の道をたどればわかるほどだ。本当に全身のほとんどが血にまみれて、彼が立つ地べたには、小さな赤い水たまりができています。

もう長くないことは、確かだった。

この様子を、傍から見ている人々はどう思うだろう？

瀕死の状態であるにもかかわらず、口元から笑みがこぼれた。そこで、もう自分には、痛みと言う感覚がなくなっていることに気づいた。

「…馬鹿な真砂。私に敵うわけがないのに」

そう無垢に悪気もなく飄々（ひょうひょう）と言い放った少女を、男『真砂』はにらみつけた。

この齡14ほどの少女は、名を桜姫 おうひめ と言った。栗色の長髪に、桃の着物をまとった、美しい少女。

けれどその顔は、計り知れぬほどの歓喜と、恐ろしいほどの狂気に満ちていた。

そんな少女に、真砂はゆっくりと言い放った。

「桜姫…っ、…貴様！ それ以上、姫に、近づ、くな…！」

肩が、異様なほど上下していた。息が苦しい。

朦朧とし始める意識の中、真砂は空色の瞳で、桜姫を凝視した。

真夜中だというのに、彼女の周囲だけが異様に明るい。白く、鈍く光っている。

何かが憑いているのは、今の姫が姫本人でないのは、確かなようだった。

ふと、月を見上げた。

半月にも、三日月にも似たそれが、真砂と桜姫の二人を、妖しく照らし出している。

その月に照らされ、さらに美しく見える桜姫は、にやりと笑っていた。

「くすくす。真砂。あなたが、私に敵うわけないの。さつきも言ったはずよ」

「…姫。敵う、敵わ、ぬの問題…では、ない…と、私も、言ったばかり、です」

何度言っても無駄なことは、真砂自身も分かっている。

何しろ、目の前にいる桜姫は、もう彼女自身ではないのだから。

あんな少女ひとり止めることもできず、言葉を紡ぐのでさえいっばいっばいな自分に、とても腹がたった。

ちらりと、自分の背後を見やった。

所持していた一級品の刀が真つ二つに折れ、地面に突き刺さり、月光を跳ね返していた。そう。今の真砂に、身を守る武器は存在しないのだ。

それでも、真砂は諦めようとはしない。少しでもあきらめたら、立っているのでさえ困難な自分の体は、勝手に気を失うに決まっている。すべては気の持ちようだ。

「姫。目を、覚まし、て、ください、私の声を、聞いて…ぐっ!？」

口の端を、喉からこみあげてきたものが伝う。確認するまでもなく、血だ。

すこし、しゃべりすぎたかもしれない。

何度かせき込んでから、真砂はもう一度、月を見上げた。

この命は今日ここで、尽きる。そして何事もなかったかのように、時が流れていくだろう。

その時、この姫君は、幸せに暮らせるのだろうか。流れゆくときと同じように、何事もなかったかのように？

真砂は、無意識に首を横に振っていた。自分の考えに対する最大限の否定だ。

この憑いている者に、心を支配されたままなら、まだいい。だが、もし、もしも心を取り戻したら。きっとこの方は、今までのことを後悔する。そしてまた、再び、私を怨むだろう。

真砂の心を、まだ幼いころの、優しい桜姫の姿が満たした。それと同時に、この姫君を守りたいという感情があふれ出てくる。それが、どんな形であろうとも。

「…姫君よ。私を、怨むな、ら、恨め。殺したい、なら、殺せ」
私はそれに足ることを、してしまっただから。

そう言うと、真砂は、どこからともなく細身の刀を手にした。鋭く月光を跳ね返す刀身は、すこし、赤みを帯びているように見えた。突然のことに、桜姫も目を丸くする。

「桜姫：！」

彼は、すべての迷いを捨て去ったようだった。泣いているのに、何の感情も表わさぬ、能面のような面持ちのまま、真砂は桜姫に斬りかかった。

真砂の瞳は、夕陽にも炎にも紅蓮にも似つかぬ、赤い色をしている。

愛しいひめ（後書き）

よろしければ、感想などお送りください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1584i/>

真桜姫伝承

2010年10月8日13時11分発行